

丸山孝雄著

法華教学研究序説

—吉蔵における受容と展開—

三 桐 慈 海

隋の吉蔵は破邪顕正の論理を立てて、いわゆる三論宗の独自性を發揮したが、その論理を基盤として多くの経や論に注釈を施したことは、一つの特色として挙げられよう。就中、法華經に関しては論を含めて五部もの注疏が現存し、吉蔵がその半生において如何に法華經研鑽に意を注いだかを窺わせるものがある。ここに「吉蔵における受容と展開」の副題のもとに、丸山孝雄氏がその法華教学についての研究成果を公刊せられたことには、その点に着目せられてのことと推察される。近頃、吉蔵の思想とその中国佛教における位置づけが盛んに研究されるようになり、その成果が相次いで発表されている。そのような状況にいたった理由については、既に記したところであるが（書評・平井俊栄著「中国般若思想史研究」佛教学セミナー第24号）、ここにまた經典とその注疏の研究という観点からの研究がまとめられたことは、斯学にとってまことに慶ばしいこと

である。「はしがき」によれば、著者は初め原始佛教における佛伝の研究より手懸けられ、後に立正大学において故坂本幸男博士のすすめにより、中国の法華教学の研究に携わることになったとの由、同大学法華經文化研究所に深い所縁がおありの故博士の願いが、今時このような形であらわされたことを思われるのである。

本書の特色を一言で紹介するならば、吉蔵における法華經注釈上の重要な諸課題を取り上げて、その意味を明らかにしたうえで、サンスタリット本の法華經の原意と如何に即応しているかを検討することに、その関心が向けられているように思われる。その諸課題とは、開会思想としてまとめられるものの中に、乗と身の権実・開会・五乗・一乗三乗の關係・佛身などがあり、その他に正像末の三時説と神通の問題が提起されている。これらの課題についての論究は、法華關係の五部の疏の全般にわたってなされているが、中でも「吉蔵の円熟期の法華經觀を知る上に至便の書」として、法華遊意が選ばれて論じられ、卷末にはその訳注が付録として載せられている。このことは吉蔵の法華經觀上の重要な課題を明らかにするにあたって、それらの語句の意味を明確に把握するという、基礎的な作業が行われることにもなり、そのような問題の設定がなされたなかでの論究が、「序説」としての意義をもつことにもなっているようである。したがって本書は比較的短い論文が多く集められているように見られるが、それらの論文が相互に関連し合い、しかもそれぞれ

の論文には十分な付註がなされ、その該博な学究の一端が示

されている。

二

本書は序論を含めて三部と付録からなる。序論では、第一章「インド・中国の法華教学」において、およそ法華経講鑽に従事したと考えられる人々の名を挙げ、その業績が簡略に概観されている。また吉蔵の伝記もここに取り上げられている。第二章「近代日本における中国法華教学の研究」では、吉蔵の法華経観に関する近代の研究成果を、主に著書を中心に紹介し論評も加えられている。それは織田得能「法華経講義」を初めとして本田義英「法華経論」に至る、昭和十九年迄の二十七人の諸師の著述に及んでいる。またそれに続いて、吉蔵の法華経に関する諸注疏の種類や撰述順序について、近年迄の諸学者の見解も整理されて示されている。したがってこの二章の内に吉蔵の法華教学に言及したほとんどの学者の名が網羅されているといつてよい。第三章「法華教学研究の問題と方法」では、著者の研究に対する方法論が述べられており、それにもなつて法華経の梵本やチベット語本についての現況が紹介されている。以上のように序論においては、近年までいたる中国の法華教学の研究が概略まとめられ、そのような状況の中での本書の目指す研究方向が述べられているのである。

第一部「法華経開会思想の受容と展開」では、開会の語義、五乗、権実、三一、佛身が課題として設定されている。第一章「吉蔵の開会思想概観」では、吉蔵における乗方便乘真実と身

方便身真実の意義を検討し、開会の語義をそれより導き出している。すなわち「開」は「覆」の反意語で「覆いを開く」の意であり、「会」は融会と会帰の二義があつて、教と行に使ひ分けられているが、本来の一つに会わせるの意であるという。また「開」は *vidhana* に当たり、吉蔵の釈は梵文の語義に相応していることを確めている。第二章「法華玄論における五乗と三引」では、いわゆる三撰法門の意味を説明して撰法に関連して五乗が説かれるとし、五乗とは教であつて、それを修して得られる果報である人身等の五種が、対応させて用いられているという。第三章「五乗と菓草喻品三草二木」では前章を受けて、三草二木譬と五乗の關係を吉蔵の諸疏を互照させて眺め、続いて法雲の義記と智顛の文句の説と比較する。これらの同異は図式化されて説明されている。第四章「法華義疏における一実二權説と一実三權説」では、先ず法華義疏の構成が概略示され、次いで大乘玄論一乘義にみられるところの、偏行六度の菩薩を立てる説を吉蔵が批判するに用いた経証八文を、詳細に検討することによつて、吉蔵が一実二權の三車家の立場に立つことを明かにしている。そして吉蔵所引の経文と梵本の概当箇所と比較して論じられている。また続いては一方に吉蔵が「道理既無三」の一実三權説を述べる場合もあるとして、両説の矛盾を指摘し、その会通への苦心があつたと論じている。そしてそれは法華義疏にみられる具体的な四車を位置づける文を提示することによつて述べられる。第五章「法華遊意における三中一と三外一」では、法華遊意に引用されている経文を諸本と比較検

討し、前章に関連しての吉蔵の三一の理解の是非を論じている。以上が乗の権実を中心に論ぜられたものであるが、次の第六章「法華遊意における佛身觀」は身の権実に関わるものである。

ここでは吉蔵の法華關係注疏にみられる種々の佛身義を整理して、三身四身の關係を図式化して示し、「法身・応身(=報身)・化身」の三身にまとめ、その応身を「内応法身」と「外応大機」とに開いて、本迹俱開(権実俱開・真応俱開)の説を立てた。この説は既に「法華義疏」にみえ「法華遊意」撰述の時期には定型化していたことが知られる。」と述べられている。なお本章において念佛礼佛の意義に注意されている。

第二部「法華教学研究上の諸問題」では、三草二木譬、三時説、神通の示現の問題について詳しく論じられている。第一章「藥草喩品の三乗と人・天」では、三草二木譬が法華經諸本において詳細に比較し論究されて、梵本と妙法蓮華經そして吉蔵の五乗説の間には、人天の位置づけに相違のあることが指摘されている。第二章「吉蔵の三時説と後五百歳」は、妙法蓮華經の「後五百歳」の句に対する吉蔵の解釈が課題とされており、興味深い論究である。この章では「後五百歳」の解釈は一貫して第二の五百年であることを注意し、三時の年数の相違によって吉蔵の種々の苦心の解釈があったことが示される。殊に法華玄論における正法千年像法千年末法一万年の説が、法華義疏では五百年・五百年・一万年に移行されていく意味を詳述している。第三章「中国における末法思想と後五百歳」では、先ず法華經に見られる五濁や後五百歳そして像法の語と、法華經各品

の成立期の關係を検討し、正法像法の語は本来は未來佛や過去佛に関する問題で佛滅後を示すものではなかったと提示し、また安樂行品の末法末世の語は正法滅尽の時である像法にあたることを確かめ、その上で中国の諸師の解釈の意味の検討に及んでいる。第四章「法華經における神通の示現とその意義」は、法華經にみられる神通の種々相、すなわち兩華・地動・放光・神通力などが、經文にどのように表現されているかの一一を検討し、その内容は多岐にわたるが、神通と方便の密接な關係に注意すべきであることを論じている。なお本書の卷末には付録として法華遊意の訳註が載せられている。読み下し文には大正藏經の頁が付せられ、全体は内容によって詳しく章分けされている。また註は詳細になされているので、法華遊意を読解する上に大いに指針となるであろう。

三

以上のように吉蔵の法華經觀における重要且つ基本的な課題は、本書において法華經の原典研究的な論考の上に再吟味され、それによって吉蔵の用いる語の意義がより明瞭に把握されて、思想究明がより一層すすめられたように思われる。このような研究が基盤となって今後いよいよ吉蔵の思想全般が解明されていくことを思うのである。したがってこれは恐らく今後の課題とされていくのであろうけれども、副題に示される受容と展開についての論究が眼目となるであろう。本書中にはしばしば国内的展開のあることを指摘しておられるが、その内容は十分

に示されていない。それが中国佛教として何を意味し、如何様に展開し、いかに吉蔵の思想形成が行われていったのかを、今後に示されていくものと思われる。それに関連して、「破三」「廃三」を、「三乗すべてを方便乗として破し、廃する」とする解釈は、三車家の本意ではなからうか。(一〇〇頁)と述べられているが、果してそうであろうか。先ず吉蔵を三車家と決定してしまつてよいのであろうか、あるいはどのような三車家なのであろうか。このような疑問を感じるものである。これは後の三中一と三外一の問題(一五九頁)にも関係してくるのであろう。また佛身については先に紹介したように、種々の形態が詳細に論じられている。そして法華遊意の撰述期にはほぼ定型化していたと述べられている。これに対して別に異論をもつものではないが、私見では、吉蔵は課題が提起されるに依じて、種々の佛身義の中から適時に解説したものと考えている。したがって諸注疏の中に見られる佛身義と、その提起されている内容との関連を重視したいと考えるものである。

大麥大雜把な紹介に終始して、著者の意を尽し得ないままに終るのを恐れるのであるが、近頃中国佛教とは何であろうかという迷いの中にいて、感想を添えさせていだいた。

(昭和五十三年三月、平楽寺書店、A5版、五七四頁、八〇〇〇円)

「佛教学セミナー」バックナンバー発売中

既発行の「佛教学セミナー」のバックナンバーを御希望の方は、佛教学研究室又は文栄堂書店に申し込み下さい。二冊以上お申し込みの方には送料を当方で負担します。

1～3号	品切れ	15～17号	350円
4号	200円	18～19号	400円
5～7号	品切れ	20号	品切れ(特集号)*
8～10号	250円	21～24号	600円
11～14号	300円	25～29号	700円

* 第20号は特集号で、別に単行本として文栄堂書店より発売中(4,000円)。

※既刊号の総目次は本誌26号に掲載されています。

4, 12, 22号は残部僅少です。